

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10833

研究課題名（和文）日本伝統スポーツの文化資源化に関する人類学的研究

研究課題名（英文）The Anthropological Study on Contemporary Traditional Sport in Japan

研究代表者

小木曾 航平（Kogiso, Kohei）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：00711235

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、伝統スポーツが地域社会の文化資源となるための課題について、担い手の視点から多角的に検討を行った。特に伝統スポーツを観光化したり、あるいは、文化遺産化する際に考慮すべき点として、担い手の主体性について検討を行った。伝統スポーツが単に観光資源になるだけでなく、地域の伝統文化であり続けるためには、担い手たち自身による伝統スポーツの再文脈化やスポーツ化といった変化が重要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の文化遺産ブームが象徴するよう、行政主導の文化資源化が日本の伝統スポーツに対しても影響を持ち出している。こうした中、本研究は政策論的な視点からではなく、あくまで文化論的な視点に立ち、伝統スポーツの担い手の視点からその課題や問題点をあぶり出そうと試みた。そうすることで、伝統スポーツを単なる観光資源ではなく地域の伝統文化としても継承し続けていくための新たな視点を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the challenges for traditional sports to become a cultural resource for local communities from various perspectives of their stakeholders. In particular, the study considered the subjectivity of the stakeholders of traditional sports as a point to be considered when making traditional sports into a tourism resource or cultural heritage. It was suggested that in order for traditional sports not only to become a tourism resource but also to continue to be a part of local traditional culture, it is important for the stakeholders themselves to change traditional sports by re-contextualizing them and sportifying them.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：伝統スポーツ 文化資源 文化遺産 観光化 スポーツ化

1. 研究開始当初の背景

(1) 「スポーツと文化資源」への関心の高まり

2003年にユネスコは「無形文化遺産保護条約」を採択し、スポーツを含む無形の文化を人類の遺産とし、保護・継承していくことを決めた。さらに2015年11月、ユネスコは新しい「体育・身体活動・スポーツ国際憲章」を発表し、スポーツの文化的多様性は人類の遺産であることを再確認した。こうした背景のもと、日本のスポーツ庁・文化庁・観光庁は「スポーツ文化ツーリズムアワード」を創設し、スポーツ文化遺産を観光振興や地域振興に活用しようとする動きを活発化し始めている。本研究では、このような流れの中で地域の伝統行事であった伝統スポーツが、より普遍的な文化へと変容し、その価値を多様化させる現象を「文化資源化」という概念で捉え、それに批判的な検討を加えていくことを目指している。

(2) 文化資源化が引き起こす問題

では、そうした文化資源化に対して、どんな視点から批判的検討を行うべきだろうか。例えば、無形文化遺産の文化資源化を論じる先行研究は、文化資源化が引き起こす担い手の多様化や地域コミュニティの再編を指摘する。文化資源化の過程で、地域の文化遺産だったものはより普遍的な文化として再解釈され、より幅広い層の人々に共有されていく [Foster, M. D & Gilman, L. (eds.), 2015, *UNESCO on the Ground*, 飯田卓 (編) 2017, 『文化遺産と生きる』など] このことは観光化等による経済的恩恵を地域にもたらす一方、その文化の正当な保持者であるはずの担い手たちに大きな変化をもたらし、その所有をめぐる葛藤を生み出している。スポーツの文化資源化においてもこの視点は重要である。

これまで筆者らはこうした文化資源化の問題に取り組んできた。田邊元 (研究分担者) は富山県の「おわら風の盆」を対象に、その継承に関わる担い手の変化について考察している [田邊元 2014 「民俗芸能における真正性と伝承方法に対する一考察 - 「おわら風の盆」のフォークロリズム的解釈を通じて - 」 『現代民俗学研究』 6: 59-72] また、小木曾航平 (研究代表者) と孟蒙 (海外共同研究者) の近年の研究は伝統スポーツがコミュニティの維持に寄与する一方、それが無形文化遺産になることは、担い手の拡大や外部との接触増加を引き起こし、その意味や価値を変化させることを明らかにしている [小木曾航平 (2017) 「無形文化遺産に関するスポーツ人類学的研究の可能性: メキシコ先住民伝統スポーツ(「ペロタ・ミシュテカ」)の伝播を事例として」 『体育学研究』 62(1): 115-131] 孟猛、2016, 『清水江苗族龍舟競漕の観光化変容』(早稲田大学博士学位論文) など] 一方で、中嶋哲也 (研究分担者) と楊長明 (海外共同研究者) は沖縄や中国において、武術の観光化がもたらす歴史観の変容や継承組織の制度的再編成を論じてきた [楊長明 (2015) 『中国朝鮮族シルムのエスノグラフィー』(早稲田大学博士学位論文) など]

本研究は、スポーツの文化資源化が引き起こす、こうした担い手とコミュニティをめぐる“揺らぎ”に、改めて着目する。今日、文化遺産ブームによって、行政主導の文化資源化が日本の伝統スポーツに対しても影響を持ち出している中、その正当な担い手にとってはどんな変化が望ましいのか。本研究は、伝統スポーツの担い手の側から、文化資源化の可能性について多角的に研究を行っていきこうと考えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スポーツの文化資源化の可能性を担い手と地域コミュニティの社会生活に根ざした次元で検討し、スポーツが地域の資源となることの意味を文化論的に明らかにすることである。とりわけ、地域に継承される伝統スポーツがより普遍的な文化資源へと変容していく過程で生じる (1) 観光化、(2) 担い手の多様化、(3) 身体技法の変化、(4) 地域コミュニティの再編成に注目し、担い手の視点からスポーツの文化資源化の可能性について多角的に検討することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、以下の伝統スポーツについてフィールドワークと文献調査を実施した。調査においては、各伝統スポーツにおける文化遺産化や観光化への取り組みに着目すると共に、それに伴う担い手の多様化と地域コミュニティの再編成過程を明らかにしようとした。なお、フィールドワークという現地調査の形態をとる調査方法のため、新型コロナウイルス感染症拡大期においては、必ずしも当初の予定通りには調査を行えなかったことを付け加えておく。

表 1 フィールドワークの概要

	名称	場所	時期
1	竿燈	秋田県秋田市	2018年8月
2	平庭闘牛	岩田県久慈市	2019年8月

3	權伝馬競漕	広島県豊田郡大崎上島町/ 愛媛県今治市大三島町	2019年8月、10月/2021年 7月
4	ペーロン競漕	長崎県長崎市	2019年7月/2021年7月
5	沖縄空手	沖縄県那覇市ほか	2018年8月/2021年11月
6	沖縄闘牛	沖縄県うるま市ほか	2022年11月



写真 1 第1回沖縄空手国際大会



写真 2 長崎ペーロン選手権大会



写真 3 大崎上島の權伝馬競漕



写真 4 沖縄闘牛

4. 研究成果

各地の伝統スポーツの文化資源化過程で明らかになったことを以下の3つの視点から報告する。

(1) 伝統スポーツの再文脈化

それぞれの伝統スポーツで観光化や文化遺産化への取り組みが確認された。これまで、特に観光化が取り上げられる際には文化変容、伝統の創造、そして、その過程で被る脱文脈化が議論されてきた。それらの変化は観光資源としての価値を高めるため、当該伝統スポーツの真正性の維持や見せ物としての面白さの創出を目的とした結果であり、それ故、担い手らのコミュニティの外からやってくるそうした観光客のまなざしの影響は、外的変化と考えられるだろう。しかしながら、本研究が調査した事例の多くで、単に一方的な外的変化では捉えきれない、内側からの変化が生じていることが示唆された。それらは、担い手らが自分たちの楽しみごとである伝統スポーツを何とか伝承していくために試行錯誤して練り上げてきた変化の方向性であった。奇しくも、そのような内的な変化の力は、コロナ禍にあって際立ったとも言える。そこで改めて論点となりそうなのが「スポーツ化」である。

(2) 「スポーツ化変容」の再考

伝統スポーツ論において「スポーツ化」は必ずしも肯定的に捉えられてきた訳ではなく、上述のように伝統からの脱文脈化を引き起こす要因として理解されてきたと言える。他方、本研究では、担い手ら自身がそれを求めて、伝統スポーツを「スポーツ化」していくことを肯定的に捉える視点の必要性を認めた。例えば、長崎ペーロン選手権にしても、沖縄闘牛の全島闘牛大会にしても、必ずしも観光化だけを意識してイベントの規模を拡大してきた訳ではない。むしろ、担い手たち自身が競争を楽しむためにスポーツ化を目指してきた結果でもある。技術の向上や大会運営のノウハウには、いわゆる伝統的な方法だけでなく、より近代的と言える手法も取り入れられている。だからと言って、ここで取り上げた伝統スポーツの多くが近代スポーツのようになった訳ではない。それぞれの伝統スポーツが部分的に近代スポーツの特徴を取り込みながらも、一

方で、その特異な文化・社会的文脈を維持し続けてもいる。伝統スポーツのスポーツ化変容はそうした近代/非近代の境界を揺るがすような実践であると言える。

(3)「よそもの」の機能

(1)と(2)の文脈に一層の複雑さを付与するのが伝統スポーツの担い手の多様化である。例えば、沖縄空手は20世紀後半より、いわゆる競技空手のグローバル化とインターネットの発展によって国際的な関心を集めるようになっていた。そうした外国人空手実践家が期待する沖縄空手のイメージは、翻って、沖縄人空手家の文化的自画像を揺さぶっている。沖縄空手の真正性は、そうした「よそもの」である外国人空手家と沖縄人空手家の交流の中で少しずつ形成されてきたとも言えるだろう。

竿燈や權伝馬ではこうした「よそもの」がインターン者や地元の大学・高校に通う学生になる。彼らもまた外からのまなざしを持ち込む文化的他者であり、彼らの存在そのものが伝統スポーツの実践や組織のあり方を変容させる要因となる。本研究が調査した各地の事例では、「よそもの」と従来の担い手が互いに排他的になるのでもなく、また、すんなりと融和する訳でもなく、それぞれの役割・機能を果たすことで、伝承という過程を活性化させている様子が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中嶋哲也	4. 巻 66
2. 論文標題 柔道の礼法における戦中・戦後史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 573-590
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.20155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KOGISO Kohei, TANABE Gen	4. 巻 65
2. 論文標題 Rearrangement of a local community through traditional sports:	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Taiikugaku kenkyu (Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences)	6. 最初と最後の頁 831 ~ 848
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.20014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kogiso Kohei	4. 巻 13
2. 論文標題 A Contemporary History of a Traditional Sport: Ushiorase (Okinawan Bullfighting)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The International Journal of Sport and Society	6. 最初と最後の頁 65 ~ 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18848/2152-7857/CGP/v13i02/65-81	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小木曾航平、田邊元
2. 発表標題 日本の地域社会における伝統スポーツの文化資源的可能性：岩手県久慈市山形町における「平庭闘牛」の形成と発展
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第19回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小木曾航平
2. 発表標題 近現代における沖縄闘牛の歴史 - 農村娯楽から土着文化へ -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中嶋 哲也 (Nakajima Tetsuya) (30613921)	茨城大学・教育学部・准教授 (12101)	
研究分担者	田邊 元 (Tanabe Gen) (40758588)	富山大学・学術研究部芸術文化学系・講師 (13201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------